

「比較文学の観点から見た 韓国・日本・中国近代文学の特徴」¹⁾

李 鍾振
(辛 夏寧 訳)

1. 序言

本稿は、近代文学とは近代という時間的な背景だけで規定されるのではなく、近代的な精神と形式を備えた質的に新しい文学であるという観点から出発する。つまり、近代文学とは‘市民精神を内容とし、自由な散文を形式とする文学’であり、分化されたジャンルの概念によって形作られた文学である。イデオロギーの面から見れば自由主義・個人主義を基盤とし、様式は市民社会の複雑な様相を表現するのに適切と思われる小説が主な位置を占める。また、文芸ジャーナリズムの成立、文学とメディアの制度的結合などを伴っている。このような文化現象は、社会における文学の機能や意義を増大させた。結局のところ、近代文学はそれ以前の時期とは異なる社会条件と意識を背景に誕生したので、時代区分としての近代と結びつくわけである。

西洋の市民社会とは異なって韓国・日本・中国の東アジア三国は、近代国家体制が整備され市民社会が形成される過程において、‘外部からの’強制的な門戸開放が決定的な契機となった。よって東アジアの近代意識や文学意識も、(半)植民地という現実に制約を受けざるを得なかった。その結果、前近代的な封建制度が精神文化の諸領域に残存し、文学が近代性を獲得するにも様々な試行錯誤が必要であった。

東アジア三国の近代文学の比較研究は、西欧によって蹂躪された歴史を復元する作業の一環とも言えるだろう。現在、近代性とその克服が東アジア諸民族の主要な課題であるからこそこれは大事な作業である。が、今まで東アジア三国はその立場を共有することが出来なかった。その理由の一つとして、日本が最も先立って近代化を断行し、中国と韓国のもう一つの近代化モデルとなったことが挙げられる。三国は西欧への対応

方法や政治体制が異なったため、近代性を一つの枠として見るのが困難であった。よって三国が近代を説明する際、外部からの影響を強調する立場と、自発的側面を強調する立場とが相矛盾し、それぞれのアイデンティティーを確立出来ないまま、自国中心の観点で文学史を記述しているのが実状である。例えば中国の学界では、中国文学の近代化に当たる時期を、‘中国現代文学史’という特定の歴史単位とするのが一般的である。²⁾ これは、毛沢東の‘民主主義論’に従った結果であり、この時期の文学を‘新民主主義文学’と規定している。明らかにこれは文学の内的発展過程から導き出されたのではなく、自国の政治的脈絡に依存した時期区分である。日本で近代文学の時期を天皇の年号によって、明治・大正・昭和と明確に区分したのも内部の認識によるものであった。韓国の場合、近代文学の起点をいつにするかという問題においてさえ、意見が一致しなかった。³⁾ 一方、趙演鉉は約十年おきに発生する大事件⁴⁾によって文学の面貌が変化するとして、近代文学を十年単位で記述した。⁵⁾ これは政治や社会の変遷に基づく方法であり、文学の内的動因を探ることは二次的になってしまう結果を生んだ。つまり、文学外の時代区分で文学の流れを区画したため、文学それ自体の流れと変化、断絶と連続を見出せなくなってしまったのである。

最近各国でこのような問題を克服しようとする動きがあるが、未だ新しい文学史として実現する段階には至っていない。よって本稿では、先ず東アジアの近代文学の展開過程に見られる差異と共通点を明らかにし、その個別性を基に普遍性を探りたい。

2. 韓国・日本・中国近代文学の個別性と普遍性

先ず、近代文学史が初めて記述された時期を見ると、西洋各国では19世紀初に始まったのに比べ、日本では19世紀末、中国では1910年代、韓国では1945年以降になって自国の文学史を研究、整理することが可能になった。これには近代民族国家の成立が契機となっており、日本の場合、1868年の明治維新が重要な転換点であった。中国は1919年の辛亥革命を経験する過程で、近代への指向性がより明確になってきた。韓国はこの重要な時期に主権を失って植民地となり、近代民族国家を建設することが出来なかった。自国の文学史を記述するための条件が準備

されなかったわけである。そして1945年に独立を迎え、やっとこの未完の課題を一挙に完成させようとした。⁶⁾ この過程を図式的に説明すると、東アジア三国は西欧の近代勢力との接触によって門戸を開き、その初期には西欧の近代文物を消極的に受容したが、西欧近代勢力の物理的侵略が露骨になるにつれ、積極的に対応するようになった。つまり、西欧勢力との接触段階、門戸開放段階、急進的改革段階という過程を経たのである。中でも日本は、最も早く東アジアの伝統から離れて西欧文物を受け入れ、全面的な近代化を断行した。すなわち制度全般における西欧化を意味する1868年の明治維新である。⁷⁾ 日本の国力が伸張するに伴って、西欧化への急進的な改革の波は、韓国と中国でも自強運動の一環として受容された。韓国の1894年の甲午改革と、中国の1898年の戊戌変法がそれである。

日本では最も早く体制側の主導で啓蒙運動が行われ、新聞や雑誌が創刊されたり政治小説が登場したりした。⁸⁾

中国では、戊戌変法を通じて中体西用論が登場し、新小説や新詩體運動が起こった。また、政治小説や通俗大衆小説の登場と期を同じくして、新聞と雑誌が刊行され始めた。その後、この運動はより急進的な方法で展開され、辛亥革命が成功すると、新文化運動へと繋がった。

韓国の場合、近代の成立過程で日本の明治維新や中国の辛亥革命とは多少性格が違う甲午改革が断行されるが、日本の植民地に転落してからは、植民地状態の克服や近代化を標榜した啓蒙運動が進められた。

東アジアの近代文学は、最初から西欧的な近代の概念である平等思想・科学思想・民族思想を土台として起こっており、これらの思想の実践と近代文学の展開過程とがかみ合っている。ここで言う実践とは、近代思想を伝播するための教育機関の設立・雑誌の創刊・言文一致運動などを指す。これはまた近代文学の創作・出版・鑑賞など、民族主義を高揚させるための文学的实践へと繋がっていく。これらの点を考慮すると、東アジアの近代文学の成立は、政治変革の契機となったと言えよう。近代文学が社会・制度・精神の変化をもたらす決定的道具であったからである。よって政治変革との相互作用を考慮しながら、近代文学を生み出した近代性と、その展開の様相を明らかにする必要がある。

3 . 近代文学の近代性と三国文学の展開の様子

東アジアの近代文学の‘近代性’についての論議は、様々な側面から進めることが出来る。近代性を論ずる文学主張、意識・題材、主題・文学形象・言語・構成、技巧・文学様式・創作方法、流派・思潮・西欧文学の影響など、それぞれの面でどれほど内実のある成熟を遂げたかを評価するのは、容易なことではない。よって、西欧文学との影響関係を究明することの出来る幾つかの面を中心に、東アジア三国の近代文学の展開を考察するのがよいと思われる。例えば、西欧文学の影響を直接受けて生成される文芸思潮や、西欧の教育制度のもとで輩出された作家と読者の様子、近代社会の新しい産物であるメディアと言語の問題、政治背景に対応する文学の展開についての研究がそれである。

文芸思潮が受容される過程について見ると、三国はそれぞれ異なる経路を通じて西欧の文芸思潮を受容するが、受容後の展開過程においては類似した様子を呈する。ただし日本の場合、韓国や中国とは違って能動的、自発的に近代の文物や思想を受け入れ、留学を通じて西欧文学の影響を直接受けた夏目漱石ら知識人の手によって文学の近代化が進められた。それに比べ韓国や中国の知識人は、主に日本語の翻訳物で、まれには西欧の原作を読んで近代的な文学様式に接することが出来た。しかし、西欧で約 200 年にわたって自然発生的、漸進的、順次的に展開された文芸思潮が、東アジアでは 2、30 年のうちに急速に受容されたため、文学集団或いは個人ごとに混乱した受容の様子を見せるという点では、三国とも類似している。まして韓国や中国の場合、文芸思潮の受容に際して重訳による誤訳の問題まで発生した。作家らは古典主義・ロマン主義・写実主義などの各系列に属する作品を、時間の間隔を置かずに取り扱ったため、ほとんど同時にこれらの影響を受けた。その結果、この時期の作品にはそれぞれの思潮が混在する多面性が表れるようになった。

三国において近代の文芸思潮が極めて混乱な様子を呈した理由をまとめると、次の三点を挙げる事が出来る。

まず、それぞれの文芸思潮が正常の歴史的交替運動の中で生まれたのではなく、西欧社会の文学潮流を無秩序に模倣したものであったためである。近代的発達過程を経た西欧の場合、ロマン主義は古典主義に対する反発として、また写実主義や自然主義はロマン主義に対する反発とし

て現れたが、三国の場合はそれぞれの文芸思潮が混在する状態であった。例えば韓国の場合、『創造』の写実主義・自然主義運動は、啓蒙主義を拒否する純文学運動として始められた。また『白潮』のロマン主義運動は一種の‘感傷的気分運動’であった。

中国の場合、作家らは‘拿来主義’を提起しながら、あらゆる方面から新しい思潮を吸収しようとした。中国の特殊な歴史情況と啓蒙主義文学のためリアリズムが主流の地位を占め、実用の伝統及び実践的、功利的目的と結合して中心脈絡を形成した。西欧の近・現代文学で主導的な役割を担当したモダニズムは、時期によっては一定の影響力を發揮し、幾つかの文学団体も形成されたが、リアリズム文学によってその創作手法が吸収されていった。中国の五・四運動から1940年代まで、モダニズムは一つの支流として創作や作家精神の具現にある程度影響を及ぼした。が、結局土着化されなかった理由は、中国の伝統に対する叛逆意識と、西欧モダニズム作家たちの抵抗意識の文化的背景とが全く異質であったためである。日本の状況も同様であった。明治維新以降、写実主義がロマン主義や自然主義より先行したり、古典主義と写実主義が結合される現象を見せている。この全ての現象が同じ時空間において生成されたという事実からも、その混乱を推し量ることが出来る。

二つ目の理由として、文芸思潮の概念に対する誤解を挙げることが出来る。韓国や中国の場合、日本語の翻訳物に依存しながら作品や理論を受容したため、重訳の問題点が際立って目に付く。両国とも写実主義と自然主義を同義語として解釈したし、ロマン主義を類廃主義という意味で使うこともあった。

例えば韓国の場合、『創造』は啓蒙主義を拒否した李光洙の、純文学に対する意欲がその創刊の動機であった。このような創作の態度は、やがてあるがままの人生や現実を表現する写実的な方向へと傾くようになり、ゾラが代表するような自然主義とは甚だ距離があった。その他、『廢墟』の同人らが主張したのは類廃主義であるが、実はこれは19世紀末西欧で登場した世紀末的な類廃主義ではなく、変形されたロマン主義の一種であった。『白潮』の場合も、ロマン主義と象徴主義を混同した上に、類廃主義とも区別されないといった概念の混乱が見られる。

中国の文壇でリアリズムが決定的な地位を占めるようになったのは、1932年半ば、瞿秋白がエンゲルスの文芸に関する論文やレーニン、プ

レハノフなどの文章を翻訳、発表した後であった。彼はこれらの文章で初めて現実主義という用語を使い、それまで使われていた写実主義は‘現実の事柄をそのまま写し出したり、客観的に事実の原因と結果を分析さえすればいいもの⁹⁾’であるかのように認識されていたと指摘した。それ以前の時期のほとんどの作家が、自然主義をリアリズムと混同していたという意味に解釈出来るだろう。

日本では、あるジャンルや流派の隆盛と衰退、また主流を成すジャンルの転換と発展を、文学固有の論理に依って説明せず、歴史学から借りてきた時代精神、或いは時代概念¹⁰⁾を通じて因果論的に提示した。文学の展開の中で現れた具体的な現象とは隔たりのある、所謂外在的な歴史主義文学史を記述しているのである。

最後に三つ目の理由として、文芸思潮に対する無自覚的で盲目的な追従を挙げることが出来る。プロレタリア文学陣営が特にそうであった。韓国の場合、例えば李相和は『白潮』の同人であったが、彼の作品傾向は階級主義のような公式的・機械的な範疇に固定されるものではなかったのにも関わらず、プロレタリア文学が台頭すると、ただちにそれに合流した。また、朴英熙は『白潮』の同人で耽美主義的なロマン詩人であったが、やがてプロレタリア文学の先駆的な理論家に変身した。中国でも、ロマン主義系列の創造社後期の作家らが日本やソ連への留学から帰り、1930年代の急進的プロレタリア論争を主導するようになる。

このような文芸思潮の混乱と錯誤は、東アジアの特殊な近代化過程の反映である。その原因は民族主義に基づく実用主義の性急さにあり、また近代の自覚と出発における時間的な後進性と空間的な未熟さのためでもあった。東アジアの特殊な運命を考えれば、これは必然的な現象であったと言えるだろう。

近代文学の展開を担った作家や読者の問題を論じるためには、近代以前と以降を比較する必要がある。近代以降の作家や読者の性格が変わる一番大きな原因は、教育の大衆化である。日本では、1877年に東京大学が創立されて近代化の先頭に立ち、中国でも戊戌変法による新しい措置として1898年に京師大学堂が創設され、1912年5月以降は北京大学と改称された。韓国では1883年に元山学堂が設立され、1885年には培材学堂が設立された。

中国や韓国の場合、開化以降の新教育はほとんどキリスト教の宣教師

によって始められた。¹¹⁾ その後、民間から自覚的に起こった私立学校と共に私学として発展していく。彼らは新教育を導入し、教育の機会を拡大した。教育啓蒙運動の一環として設立された専門学校・私立学校・官立学校は、主に西欧の新学問や思想に関する教育を伝授し、西欧を排斥するのではなく受容する教育を進めていった。これによって文学の新しい読者層が形成され、新文化形成の決定的な礎石になる口語体の普及に多大な貢献をした。中国では五・四運動の後、白話文の教科書が普及したし、韓国でも 1895 年 7 月に小学校令が公布されて近代的な初等教育が始められ、甲午改革を起点として政府によって国漢文混用の教科書が普及した。日本では明治 5 年(1871 年)に学制と徴兵制が公布されるが、軍隊が教育機関の役割を担当し、集団規律を基調としたのは韓国や中国とは異なる点である。何よりも、新教育が導入されたことで口語体が普及し、新しい作家と読者層が形成されたと言える。

言語と文字の問題は、文学大衆化の鍵である。漢字文化圏である東アジア三国では長い間漢字を使ってきたので、近代文学の大衆化は必然的に文字・言語の問題から始められた。1940 年代まで文盲率が 80 % 以上であった中国の場合、文言体を口語体に変えることと、表意文字である漢字を教えることは切実な課題であった。五・四新文化運動の可視的な成果が他にもない白話運動であったという事実からも、その重要性がうかがわれる。これによって現代中国語は白話文を中心とした言語体系が形成され、大衆化のための基礎を築くことが出来た。しかし、実効を得るまでにはある程度時間を要した。新文学運動期に大衆的な基盤を確保したにも関わらず、白話文は相当の間知識人の専有物であった。やがてこの問題に対する反省が提起されたが、それはプロレタリア文学運動の大衆志向的な動きと軌を一にする。¹²⁾ このようにして白話文は大衆語に変わり、漢字を表音文字化する努力は、大衆語運動の一環として展開されるようになった。

韓国でも甲午改革と前後して、国文の復興と普及、漢文調から抜け出した言文一致文体の導入、句読法の使用などが行われ、新文学形成に大きな影響を与えた。表記法の問題において重要な転換点になったのは、兪吉濬の『西遊見聞』(1895 年)である。その後、文学の表記法は急速に国文化されていく。

日本の場合も、近代初期の啓蒙運動が社会全般にわたる大衆運動へと

拡大されるにつれ、漢字廃止論、ローマ字やかたかなによる統一などの過激な主張も提唱されたが、1880年後半に至って口語文学が定着するという効果を収めた。一般的に最初の近代小説として、1887年に書かれた二葉亭四迷の『浮雲』が挙げられるが、その主な理由はこれが最初の言文一致小説だったからである。

近代直後の作家と読者の特徴は、都市の発達及びメディアの普及と密接に関連する。小説が商業的かつ専門的に流通されるようになるのは開化期に入ってからだが、印刷技術が民間に導入されたことによってますます盛行した。印刷技術の導入で本が大量に供給されるようになっただけでなく、作家と読者の関係も根本的に変化した。その変化とは、作家と読者の関係が匿名化したことである。つまり、小説が公開の場所で人々が集まって聞く形式から、一人の個人が読む記述のテキストに変わったのである。作家と読者の関係の変化だけでなく、小説の価格の設定・小説の大量供給・読書大衆の形成などは、厳密に言って印刷技術を習得した出版・書籍業者によって助長された結果であった。近代的な書籍出版業の登場によって、小説がすばやく大量に制作されるようになり、流通の方法も変わった。つまり、手工業的な方法から電車や鉄道などの交通や郵便制度を利用した近代的な方法へと転換された。その結果、専門的な書籍業者が出現し、それによって文学の商品としての性格が強くなり、匿名化する現象も現れたのである。

韓国の場合、1890年代以降『独立新聞』・『京城新聞』・『毎日新聞』や、広文社¹³⁾などの出版社組織、『少年』などの総合月刊誌や『泰西文芸新報』¹⁴⁾などが創刊され、韓国近代文学形成の重要な土台になった。

中国で商業的ジャーナリズムが起こる決定的な契機は、晩清時期に上海を中心に近代的な大衆メディアと出版業が発展したことであった。当時東南アジア地域では、西欧の宣教師によって宣教を目的とした雑誌が刊行されたりもした。本格的なメディアの発達は、1890年代の康有為や梁啓超の『時務報』¹⁵⁾から始まる。彼らはメディアを通じて啓蒙運動を実現したが、商業的な目的から自由ではなかった。これは上海という空間が資本から自由ではなかったことを意味する。このように、近代のメディアの発達は作家層と読者層にも変化をもたらした。古代から文学の受容者であり生産者でもあった士大夫階層が、固定作家として原稿料に依存する知識人に変化したのである。その後形成された文学専門誌も

商業性と啓蒙性という二重の性格を持っていた。このような特徴は、1930年代後半に文芸季刊誌が活性化するにつれますますます顕著になる。

日本では福沢諭吉(1847 - 1889)を中心に、市民社会に関する知識を提供する明六社(1874年)が結成され、大衆啓蒙活動を展開する機関誌『明六雑誌』も発刊された。福沢諭吉は「脱亞論」を書き、近代西洋の移植、つまり近代日本の誕生に先駆的な役割を果たした。その結果、日本の文物を西洋的に改良しようとする改良主義が提起された。徳富蘇峰は改良主義に思想的ビジョンを提示するため民友社を設立、『国民之友』を創刊し、平民主義に対する関心を高めた。このような運動によって、当時立身出世を夢見ていた青年たちは社会への展望を可能にし、啓蒙思想も導き出された。

1931年の満州事変以降、国内情勢が萎縮し左翼文芸団体が解体され、都市文化が発達すると共に、政治性を排除した文学思潮が脚光を浴びるようになった。このような文化的背景のもとで、純粋文芸誌の創刊も急速に増加した。文学メディアが定着するためには、先ず都市文化が形成、展開される必要があり、それに伴って意識の方向も変化しなくてはならなかったのである。

近代文学の作家層について論じる時、三国とも留学生の役割を看過することは出来ない。近代文学の作家のほとんどが留学経験者だからである。特に日本の場合、西欧文学に直接接触した留学生出身の知識人たちによって文学の近代化が進められた。同じく中国や韓国でも、最初は政府が派遣した留学生の手によって新聞や雑誌が作られ、政治小説や翻訳書が出版された。これは新文学史の上で非常に大きな意味を持つ。前近代の知識人たちが科挙を通じて登用された‘士’の階層であったならば、近代では新教育の普及によって中間階層の作家が多数登壇した。

作家意識については、20世紀は東アジアの知識人にとって、伝統的士大夫から近代的知識人へ変遷する時期であったと言える。士大夫たちは長い間選民意識の中で、政治への使命感と精神文化の継承者としての信念を保っていた。しかし20世紀の開化期に至って、士大夫の道はもはや立身出世の方法にはなり得なかった。西欧の近代的価値体系が流入されるにつれ、新しい知識人たちは伝統的価値を否定し、その代わりとして西欧の価値を受け入れた。開化期の作家たちは、前近代の作家と近代作家の特徴を両方とも持っていた。彼らは専業作家というよりは作家

を兼ねた思想家であり革命家であったので、明確なジャンルの概念を持って活動したわけではなく、必要に応じて全てのジャンルを行き来した。‘開化期の小説家たちは文学（或いは小説）という特定の分野の専門家というより、当時の社会のあらゆる局面を動かす重要な思想であるならば何にでも関心を持つ、広範囲にわたる知識層人士¹⁶⁾であったという指摘からも、これを確かめることが出来る。このような現象は、日本や中国でも同様であった。

近代文学がその質と量において本格的な成熟を見せるのは、やや差はあるものの、だいたい1930年代に入ってからである。留学第一世代の影響を受けて成長した知識人たちは、西欧の教育制度のもとで新しい文体と言語で本格的に西欧の思想を習得した。一方、彼らの文学活動の主な背景は、都市型の文化と雰囲気であった。つまり30年代の新しい作家層は、都市型の文化を伝播し享有する階層であった。海外留学派が多く、留学先は主に先進帝国の大都市であり、また彼らの年齢も尖端の文化や文明に敏感な時期であった。彼らは現代都市文化をある程度身に付けて帰国し、その文化の伝達者の役割を果たした。特に30年代後半に至っては、政治活動が不自由になり、多数の政治的色彩の雑誌が没落して、その代わり商業的雑誌がメディアの中心となった。このような雑誌は、思想的な危険性がなくある程度名望のある作家を求めた。それが外国文学に対する感覚や眼目を備えた海外派や、純文学を標榜する作家らに有利に作用し、30年代半ば以降は彼らが文壇の中心の坐を占めるようになる。中国では上海と北京を中心に『現代』の現代詩派と『新月』の新月派が、日本では『文芸時代』を中心とした新感覚派と『白樺』を中心とした白樺派が、そして韓国では九人会¹⁷⁾や『詩文学』・『文芸月刊』・『文学』を中心に活動した詩文学派がその代表的な例である。

4. 余言

以上、文芸思潮、作家と読者、言語とメディア、そしてこれらの要素の背景となる社会情況を中心に、東アジアの近代化の過程を考察した。東アジアでの近代文学の展開過程は、当時の社会情況と密接な関係を持つ。各国の政治情況はそれぞれ異なっても、民族主義を基盤にした民主化という方向性は共通のものであった。文学が必然的に社会情況の影響

を受けざるを得ないのか、それとも独自の展開されるのかについての議論はもちろんある。ただ、東アジアにおいて近代文学は、常に西欧の圧力とそれに対する応戦の過程で生み出された。よって、これは反外勢主義の方法としての西欧化とも言えるだろう。

日本での近代文学史の記述は、近代国家のナショナリティーを形成するため、自国文学の発展像を提示する事実考証に重きを置く傾向があった。中国の場合、国家体制の極端な変化によって、イデオロギー中心の文学史が長い間維持された。韓国は植民時代と民族分断の経験をなかなか克服出来なかったが、1980年以降は民族文学を強く意識する文学史が刊行されるようになった。

近代文学の展開過程において、東アジア三国の中で最も早く西欧化の道に進んだ日本が二国に及ぼした先導的な影響は看過出来ない。が、21世紀という新しい時代が到来した今、現在の文化環境を反映する新しいパラダイムによる文学史記述が要求されている。国際化する趨勢の中、現代社会の資本・情報・文化は世界中を迅速に流動している。国から国へと文化が伝播される時差はなくなり空間の隔たりはどんどん解消され、時間と空間は不安定に入り混じって連続性を失っている。

このような状況のもと、これから書かれる近代文学史は単に自国の文学的現象を解釈・評価・区分することに止まらず、東アジアの文化や文学史についての幅広い知識が前提とされるべきである。つまり、西欧の近代とは異なる東アジアのアイデンティティーを発掘する文学史が新しく書かれるべきである。東アジア文学の未来は、近代以降長い間我々の意識を規定してきた、優越的存在としての西欧の残映を振り落とすことから出発せねばならない。自国の近代文学史はもちろん、自国文学や民族文学を超えた幅広い観点から三国の文学史を包括する新しい東アジア文学史が記述されてこそ、三国それぞれの文学のアイデンティティーが確立されるだろう。

注

- 1) 本稿は、2003年3月3日に京都大学で発表した原稿をやや改めたものである。
- 2) 中国文学界では、中国文学の近代化過程を「現代文学」という概念で規定している。さらに、現代文学を近代・現代・当代と細分化している。こ

の分類は多くの問題を内包しているが、中国文壇ではこの包括的な名称について特に説明がなされていない。

- 3) 英祖・正祖起点論、1876年開港起点論、1894年甲午改革起点論、1919年『創造』創刊、或いは独立運動起点論などがある。
- 4) 甲午改革、韓日合併、三・一運動、満州事変などが約十年おきに起きている。
- 5) 趙演鉉『韓国現代文学史』、成文閣、1969年。
- 6) 趙東一『東アジア文学史比較論』、ソウル大学出版部、1993年、167ページ参照。
- 7) 一般的に1868年の幕府体制崩壊以降を近代と認識するが、西洋史の時代三分説に対応させる際、日本近代文学の上限については異説が多い。勝本清一郎は「近代日本文学の把握」(『日本文学史』、1949年)の中で、室町幕府末期に鉄製鉄砲が伝来された1543年、或いはフランシスコ・ザビエルが来日した1549年頃を近代の起点であるとした。
- 8) 柄谷行人は『日本近代文学の起源』で、坪内逍遙の『小説神髓』を明治十年代の政治小説の傾向を帯びた作品であるとした。
- 9) 瞿秋白訳『海上述林 上巻；辨林』、四川人民出版社、1983年3月第一版、244ページから引用。
- 10) 例えば、古代・中世・近世・近代の四分法や、天皇の年号を基準とする近代内部の時期区分法など。
- 11) 中国は辛亥革命の後、教会大学が発展し続け、1918年まで十四校に増えて学生数は千人に上った。中でも聖約翰大学(1905年)、金陵大学(1911年)、燕京大学(1916年)、輔仁大学(1925年)が有名である。特に教会学校の出現と発展は、中国の伝統的教育と封建文化を克服する助けとなったので、近代的な新式教育の興起と科学技術の伝播に積極的な作用をした。
- 12) 1931年に瞿秋白が左聯に合流し、文芸大衆化論がより具体的に論じられた。「プロレタリア大衆文芸の現実問題」・「大衆文芸の問題」などで言語と文字の問題・形式と体制の問題・内容と創作方法の問題などが論じられ、中でも大衆語問題が重点的に扱われた。つまり、五四式の新文言を廃し、大衆が使うことの出来る現代的な普通語を制定するべきであると主張した。
- 13) 張志淵が1899年に『時事総報』の主筆に就任するが次の年に辞任し、広文社という出版社を設立して丁若鏞の『牧民心書』と『欽欽新書』と刊行した。1901年、皇城新聞社社長に就任し、民衆啓蒙と独立精神の鼓吹に尽力した。
- 14) 編集人は張斗澈。タブロイド版、八面程度。1918年に発行された。最初は総合誌として出発したが、文芸誌に転換され主に海外文学を翻訳紹介し、海外文壇の状況を紹介した。

- 15) 『時務報』は維新派である強学会が清朝によって解散された後、北京から上海に移って創刊した機関誌である。梁啓超が主編となり、その後章太炎や王国維も参加した。政論を扱う当時最も急進的なメディアであった。これを先頭に、1905年までに『蘇報』(1896年)、『中国日報』(1899年)、『中国旬報』(1899年)、『中国白話報』(1903年)、『時報』(1904年)など、政論を扱う雑誌が相次いで創刊された。
- 16) 権寧珉「安國善と開化期知識人の幻想」、『韓国民族文学論研究』、民音社、1988年、75ページ。
- 17) 1933年に結成され、カフカが主導した非文学的政治主義に反対し、芸術性を重視した文学同好会。李箱の主管のもと、『詩と小説』という同人誌を発行した。

参考文献

- 林和 『概説新文学史』、朝鮮日報、1939.9.2 ~ 11.25
林和 『新文学史』、朝鮮日報、1939.12.8 ~ 12.27
趙潤濟 『国文学史』、ソウル、東邦文学社、1949年。
趙演鉉 『韓国現代文学史』、ソウル、成文閣、1969年。
趙東一 『韓国文学通史』、ソウル、知識産業社、1986年。
権寧珉 『韓国現代文学史』、ソウル、民音社、2002年。
李鍾振 ほか『韓中日近代文学の反省と模索』、ソウル、プリンササン、2003年。
王瑤 『中国新文学史稿』、上海文芸出版社、1982年。
陳思和 『中国新文学整体観』、上海文芸出版社、1987年。
黄修己 『中国現代文学発展史』、北京青年出版社、1988年。
温儒敏 『中国現代文学批評史』、北京大学出版社、1993年。
唐木順三 『近代日本文学史論』、弘文堂、1952年。
成瀬正勝・吉田精一 『近代日本文学史論』、矢島書房、1958年。
柄谷行人 『日本近代文学史の起源』、講談社、1980年。
臼井吉見・高宰錫 『大正文学史』ソウル、東国大学出版部、2001年。

(梨花女子大学中文科教授)

(訳：辛夏寧 全南大学非常勤講師)